

2025

People's Republic of China

文部科学省委託 令和7年度新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書



ACCU

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指し、アジア太平洋の人々と協力して、文化と教育の分野で地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は、アジア太平洋地域の国々との相互理解と友好を促進することを目的に日本政府及び国際連合大学の協力のもと、2001 年から初等中等教職員の国際交流事業を開始しました。日本と中国間の国際交流事業は、2002 年に中国から初等中等教職員を招へいするプログラムを実施し、2003 年からは日本の初等中等教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。2025 年までに、併せて 2,300 人以上の日中教職員が相互に訪問を重ねてきました。

今年度は、文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム（初等中等教職員国際交流事業）」の一環として、2025 年 10 月 10 日、10 月 19 日、10 月 20 日から 10 月 25 日、12 月 19 日にかけて中国政府日本教職員派遣招へいプログラム（中国派遣プログラム）を対面とオンラインの両形式で実施しました。

参加者は、中国教育部への表敬訪問、北京市及び天津市にある教育機関、学校、教育文化施設等の訪問を通じて、中国の教育の現状や特徴に対する理解を深めました。また、中国の教職員や児童・生徒との交流も行い、相互理解の促進と人的ネットワークを形成する貴重な機会を得ました。プログラムで得た知見とネットワークを糧に、参加者は各所属機関でアクションプランに基づく多様な取組を進めており、教育現場のチェンジメーカーとして、今後の活躍が期待されています。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました中国教育部、中国教育国際交流協会、中国国内の受入協力機関及び団体、文部科学省をはじめとする関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

2026 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目次

はじめに	2
1. プログラム概要	4
2. 参加者による訪問記録	7
3. 参加者の声	19
4. プログラム参加後の取組	22
5. 資料編	26

1. プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋諸国・地域の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進している。その活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を日本政府の協力のもと 2001 年から開始し、これまでに日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4,600 人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1,300 人以上の教職員を海外に派遣した。その結果、教職員の学びが数多くの生徒・教職員・地域住民に還元されるほか、当事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に貢献してきた。

日本と中国との間の国際交流事業としては、2002 年に中国から初等中等教職員を招へいたことを皮切りに、2003 年からはさらなる交流を促進するため、日本の初等中等教職員が中国を訪問するプログラムを実施した。これにより、2025 年 10 月までに、併せて 2,300 人以上の日中教職員が双方の国より派遣され、コロナ禍ではオンラインによる交流を行った。

2025 年度は中国教育部及び中国教育国際交流協会の協力のもと、文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」の一環として、25 名の教職員及び教育行政職員等が下記の要項に基づき中国を訪問した。また、今年度の事業は、昨年度から継続して「『あたらしい』学び」や「新時代に求められる教職員像」を考えることをテーマに掲げて実施した。プログラム期間中は、上述テーマのもと、参加教職員が異文化に触れ、多様な他者と出会い、交流することを通じて、これからの学びの在り方を問い直し、協創することを目指した。

2. 目的

- ・ 中国の教育や文化に対する理解を深めること
- ・ 学校間の連携のため、日中教職員間のネットワークを構築・拡大すること
- ・ 多様な文化が尊重される、平和で持続可能な社会を築くために、参加者がチェンジメーカーとして必要な資質と能力を培うこと
- ・ プログラムでの経験を土台に、参加教職員が教育現場や地域社会における国際交流を推進すること

3. 活動内容

- ・ 学校等の教育機関の訪問
- ・ 中国の教職員等との教育現場における交流・意見交換
- ・ 教育・文化施設の視察
- ・ 中国滞在前後のオリエンテーションやフォローアップミーティング

4. 日程

オリエンテーション①：2025 年 10 月 10 日（金）

オリエンテーション②：2025 年 10 月 19 日（日）

中国滞在：2025 年 10 月 20 日（月）～10 月 25 日（土）[6 日間]

フォローアップミーティング：2025 年 12 月 19 日（金）

日付	日程	場所	活動
10月10日(金)	事前	オンライン	オリエンテーション① (中国の教育事情についての講義を含む)
10月19日(日)	事前	羽田空港周辺	オリエンテーション②
10月20日(月)	第1日目	北京市	出国(羽田空港→北京首都国際空港) 北京経済技術開発区(北京亦庄)訪問 歓迎会
10月21日(火)	第2日目	北京市	中国教育部訪問 北京市月壇中学訪問
10月22日(水)	第3日目	北京市	北京第一実験学校訪問 故宮博物院訪問
10月23日(木)	第4日目	北京市/天津市	科大訊飛訪問 天津へ移動
10月24日(金)	第5日目	天津市/北京市	天津外国語大学附属外国語学校訪問 南開大学訪問 南開大学附属小学校訪問 北京へ移動 歓送会
10月25日(土)	第6日目	北京市	首都博物館訪問 帰国(北京首都国際空港→羽田空港)
12月19日(金)	事後	オンライン	フォローアップミーティング

5.参加者

下記の教職員及び教育行政職員等、計25名

- ・公募により選抜された、日本の初等中等教育に携わる教職員23名
- ・文部科学省、ACCUの職員、各1名

6.参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 応募時に有効なパスポートを所有していること。(入国時に6か月以上有効なパスポートであること。)
- (3) 応募者の所属機関上長(教育長・学校長等)から推薦を受けた、初等中等教職員及び教育行政職員であること。(団長についてはこの限りではない)
- (4) 健康で、オンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラム期間中の学びや経験を、教育現場や地域社会に還元し、各地で国際交流を推進できること。
- (7) 将来にわたり中国との教育交流に寄与できること。特に、中国の学校・教職員・児童・生徒・地域間の交流または、定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。

- (9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然のスケジュール等の変更にも柔軟に対応できること。
- (10) Eメールや WeChat を用いて円滑に連絡ができ、また、Microsoft Word/Excel/PowerPoint を用いて所定フォーマットに必要情報を入力し提出できること。
- (11) オンライン交流に必要な PC や通信環境を準備し、活用できること。
- (12) 出発前オリエンテーション（日本国内）から中国現地、日本帰国に至るまで、参加者負担によるポケット Wi-Fi や SIM カード、e-SIM 等により、携帯電話やスマートフォンなどの通信環境を整え、Eメールや WeChat 等で常に連絡が取り合える状況でいられること（通話を含む）。
- (13) 主催者や実施運営団体の指定する報告書やアクションプラン、アンケートなどを提出し、インタビューに協力できること。

2. 参加者による訪問記録

以下、本プログラム参加者による訪問記録を一部編集して掲載する。

オリエンテーション

10月10日（金） オリエンテーション①

活動内容

- ・開会挨拶
- ・中国の教育事情に関する講義
- ・派遣プログラムの説明・案内（ACCU）
- ・過去の参加者による経験談・アドバイス
- ・参加者間の自己紹介
- ・質疑応答



10月19日（日） オリエンテーション②

活動内容

- ・プログラム確認事項案内
- ・参加者間の自己紹介
- ・出し物練習



10月20日（月） 歓迎会

活動内容

18:30-20:10 頃	開会
	歓迎挨拶、団長挨拶
	記念品交換
	会食、歓談
	日本教職員による出し物（合唱「もみじ」）
	記念撮影

所感

プログラムを通じて参加者間の「交流の価値」と「一体感の重要性」を強く再認識した。

会食・歓談の時間に見られた、立場や世代を超えた自然な会話や笑顔は、交流の重要性を示していた。和やかな雰囲気の中でこそ、真の信頼関係が築かれることを学んだ。「もみじの合唱」では、一つの歌を全員で作り上げる過程を通じて、言葉を越えた深い共感と一体感が生まれ、こうした感動的な共有体験が、組織やコミュニティの絆を強固にする最大の要素であると強く感じた。来賓挨拶や記念品交換における丁寧な儀式は、相手への敬意と、伝統を大切にする心を伝える機会となり、形式的な要素の中にも、歓迎晩餐会の意義を参加者全員で再確認する重要な役割があることを学んだ。

10月21日(火) 中国教育部表敬訪問

活動内容

午前	挨拶 中国教育部 訪問団団長 文部科学省
	中国の教育事情についての解説 ・初等中等教育に関する政策や概況等について ・今後の目標や課題について (児童生徒の多様化、保護者のニーズへの対応、AI等)

所感

初等中等教育を「三段」と「一類」と定義し、「三段」は①学前（就学前）教育、②義務教育（小学校～中学校）、③普通高中教育（高等学校）、「一類」とは特殊教育（特別支援教育）を指す。また、2012年以降の教育制度の整備の発展速度がとても速く、2012年～2023年の変化の例として、中学高校入学率、校舎建築面積は大幅に増加し、大人数の学級も激減したという。

中国の教育事情についての解説の中で、何度か日本の特別支援教育にあたる「特殊教育」の話題が出され、多様化する児童生徒への対応は中国各地の現場でも大きな課題になっていることを感じた。そして、AI時代に学校現場では様々な課題があるという内容も日本と共通するものがあることを実感した。また、日中両国の相似した教育文化・制度を比較し、今後の具体的な教育活動につなげていくことが求められていることを再確認した。

学校訪問

10月21日（火） 北京市月壇中学

活動内容

午後	歓迎会 【挨拶】 ・北京市月壇中学 ・訪問団団長 【その他の活動】 ・生徒による学校紹介 ・生徒による歓迎プログラム（合唱）
	授業見学（3グループに分かれて見学） ①日本語 ・学習内容の確認：「時・時間の使い方」についてクイズ形式で確認 ・グループごとにクイズを作成して出題。クラスメイトが回答。 ②音楽 ・日本のアニメ主題歌を中国語（普通語）と日本語で合唱等 （グループに分かれて生徒と交流、最後に全員で合唱） ③美術 ・切り絵文化紹介、生徒と一緒に切り絵作成 ・作成した作品を書画カメラで提示し、意味などをクラス内で発表。
	学校施設見学 生徒の作品展示・食堂・図書館・学校紹介スペース等
	質疑応答・意見交換 国立と私立学校の違い、教員の男女比とその理由、人材育成の方法、模擬国連の活動、好奇心・探求心の育成方法、勉強と学習における興味をどのように両立させているのか等

所感

少子化による学校の統廃合が進む日本において、いかに自分の学校が生き残るかという点についても月壇中学のあり方は大いに参考になった。

学校においては多種多様な教育活動が展開されてお





り、活動内容も充実していた。そのような機会は、生徒個人の目標達成の足掛かりとして大変魅力的であり、さらに、在学中の勉学へのモチベーションを維持するための解決策ともなっていた。また、学校の組織的な人材育成システムも魅力の1つであり、これこそが学校として目指す姿であると感じた。加えて、授業見学では、生徒の興味・関心を引き出し、深い学びを

促す指導の実践を拝見することができた。

日中教職員による質疑応答・意見交換の際にも出た話だが、単に知識を教えるだけでなく、生徒の好奇心や探究心を維持し、実践的な能力や創造力を高める必要性を感じながらも、その方法についてお互いに悩んでいることに親近感を覚え、仲間意識を感じた。共に様々な手立てを模索し、今後もオンライン交流などを通じて意見交換をしていきたい。

10月22日（水） 北京第一実験学校

活動内容

午前	<ul style="list-style-type: none"> ・北京第一実験学校からの挨拶 ・学校概要説明 担任制度、ラーニングコミュニティを重視した校舎構造の工夫、体育科の重視、中学校・高等学校におけるコミュニティの重視 ・小学校の学習課題「学習を楽しい探求にするために」 いかに勉強を楽しくするかを考え授業を構成。カリキュラム内容を確認し、自ら目標を立てて意欲をわかせる。 ・中学校の学習課題「リアリティのある学習課題が生徒の深い学びを推進する」 試験のためでなくなぜ学ぶのかを重視。教員が課題設定を大切に、生徒の意欲を高めるよう工夫し、問題解決能力を育成。 ・学習評価「いかにして評価報告書での生徒の学習を導くか」 評価方法とその工夫の説明 ・訪問団副団長からの挨拶
	<ul style="list-style-type: none"> ・校内見学 コミュニティを活用して美術作品や食品、船などを作成。才能を伸ばし、企業に売ることができるシステム（QRコード）の紹介。 ・昼食 食育指導はなく、カロリー計算されたバラエティに富んだメニューから自由にビュッフェ形式で昼食を取る。

所感

北京第一実験学校は、中国の教育改革の最前線を体験する学校だと感じた。同校において、国際化と革新を恐れず進化する姿に刺激を受けた。特に「質の高い教育をすべての子どもに」という使命感が強く、施設やカリキュラム、教師の質全てにおいてトップレベルだと感じた。

学校訪問での学び等は以下の通りである。

一つ目は、日本の公立学校と比較するとデジタル化と環境設備の充実が圧倒的に凌駕していると実感した。施設は子どもたちの力を最大限に活かせるようになっており、それに応じた幅広い分野にわたるコミュニティが設定されていた。特に驚いたことは、化学コミュニティの実験室において3Dプリンターでミニカーを作ったり、ロボットを作ったりしていたことだ。また、それを実際に子供が値段を付けて売ることができるといった、実際にキャリア教育を体験できる良い機会であると感じた。

二つ目は、同校の先生方の平均年齢が27.7歳であり、初任者しか募集しないという徹底した方針に驚いた。「教育に対する強い意欲や探究心等をもっている教員を募集して採用している」という考え方が、日本の公立学校では到底実現できないものであり、学校裁量で独自の方針や運営方法を実施できる自由度の高さに感心した。

三つ目は、評価の頻度が1か月半程度に一度、学習の評価、自主学習の評価、協働性の評価の三つを総合して個人の成績を決定し、生徒や保護者に伝えるという仕組みについて、とてもすばらしいと感じた。一人一人の力を多面的・多角的に見られる評価方法を採用し、その結果を必ず生徒にフィードバックしていることは、生徒の力を伸ばすために重要だと感じた。

以上のような学びを通じて、中国と日本の公立学校の共通点や相違点について知見を深めることができた。



10月24日（金） 天津外国語大学附属外国語学校

活動内容

午前	<ul style="list-style-type: none">・ 施設見学・ 生徒による学校案内、生徒との交流・ 日本語の授業見学等
----	---

所感

教育の質の高さに深く感銘を受けた。特に印象的だったのは、単なる言語教育にとどまらず、長期的な視点で児童・生徒のグローバル感覚を育む教育プログラムが体系的に設計されている点である。異文化理解や多言語運用能力の習得を通して、広い視野をもつ人材を育成することを明確な目標としていることが分かった。見学を通して学んだことの一つは、教育の質とは、教科内容の深さや学力水準だけで決まるものではなく、学習者が異文化や国際社会との接点を日常的に体験できる環境を整えることによって初めて高まるということであ

る。生徒が授業や課外活動を通して主体的に学び、異文化体験を積み重ねることが、語学力や知識の向上にとどまらず、広い視野や柔軟な思考力を育む基盤となっていることを実感した。また、教員自身が学習者と共に考え、学びを深める姿勢を持つことが、教育環境の質を高める上で重要であることも理解した。

さらに、教育内容と教育環境が有機的に連動することで、長期的な視野に立った生徒の成長支援が可能になることを学んだ。単なる知識の伝達ではなく、生徒が将来国際的に活躍する力を身につけるためには、日常的な学びの中で異文化理解や問題解決能力を体験的に育てることが不可欠であると感じた。この度の学校訪問は、自らの授業設計や学校運営に対する視座を広げる貴重な機会となった。



10月24日（金） 南開大学

活動内容

午後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学構内を学生と共に見学 ・ 大学概要やカリキュラムの説明等
----	---

所感

大学概要等の説明をしていただいたことで、大学の特色等について理解を深めることができた。また、留学生が長期または短期で中国語を学ぶプログラムをはじめとする多様な教育課程が展開されていることが分かった。さらに、同大学の先生や学生の案内のもと、大学構内を見学し、キャンパスが広大で、買い物ができる場所や居住エリアもあり、訪問団は大学の規模に圧倒されていた。



10月24日（金） 南開大学附属小学校

活動内容

午後	<p>【子どもたちによる演奏・合唱披露】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 民族音楽演奏 『喜洋洋』『金蛇狂舞』の2曲が披露された。古典的な旋律を通して、豊穰・生命力を象徴する中国伝統音楽の魅力を説明。 ・ 合唱
----	--

	『馬馬嘟嘟騎』『和你在一起』を披露。
	<p>漆扇制作体験</p> <p>無形文化遺産である漆芸の「漂漆」技法を用いて「漆扇」を制作した。制作の過程では、児童と訪問団と一緒に世界に一つの扇子を作成した。完成後、扇子を見せ合い、工夫した点や感想を語り合った。</p>

所感

今回の交流では、文化を媒介とした教育の力を強く感じた。南開大学附属小学校の児童は、単なる演奏者や説明者にとどまらず、自国の文化を自分の言葉で伝える「文化の語り手」として生き生きと活動していた。伝統音楽や漆扇の紹介の際には、学んだ知識を他者に伝える自信と誇りをもって発表に臨んでおり、その姿勢はまさに「学びの主体性」と「文化の継承意識」の融合といえる。

また、訪問団側にとっても、子どもたちが自然体で伝統文化を紹介する姿に、中国の教育の根底にある「体験と継承を重んじる学び」の豊かさを感じる機会となった。演奏や制作体験を通して、音や色、手触りといった感覚的な経験が多くの言葉以上に文化を伝えており、体験的理解による国際交流の意義を再確認できた。特に漆扇づくりでは、一人ひとりの作品が異なる模様となり、「違いの中に美を見出す」という文化的価値が自然に表現されていた。この過程で子どもたちが案内役を担ったことは、まさに多様性の尊重と共創の学びを象徴するものだった。作品を介して互いの感性が響き合い、言葉の壁を越えた交流が生まれたのである。

このような体験は、訪問した私たちにとっても、自国の文化教育を見つめ直す契機となった。知識の伝達にとどまらず、「体験を通して心で伝える教育」の重要性を再認識し、今後の国際理解教育や表現活動のあり方を考えるうえで大きな示唆を与えられた。



教育文化施設等訪問

10月20日（月） 北京経済技術開発区（北京亦庄）

活動内容

午後	最新の AI 技術を活用した自動運転車への試乗等 開発区内の公道において試乗。北京市内では日常的に自動運転車が走行しており、この技術がすでに社会インフラの一部として機能している現状を知った。
----	--

所感

北京経済技術開発区での視察は、特に技術の実用化におけるスピード感と、それを支える意思決定のあり方について、深い学びと気づきを得る機会となった。

AI 技術の実用化における圧倒的なスピードや試乗体験を通じて、AI 自動運転技術の成熟度と、それがごく日常的に都市の公道で運用されているという事実、大きな衝撃を受けた。日本国内ではまだ実証実験の段階が多いのに対し、中国（特に北京）では「やる」と決めたことに対する実行の速さが、技術開発から社会実装までのプロセスを劇的に加速させていることを確認した。この「実行力」こそが、イノベーションを社会に浸透させる鍵であると強く認識した。



10月22日（水） 故宮博物院

活動内容

午後	紫禁城、太和殿、乾清宮等の見学 ※現地ガイドの方による案内のもと、見学。
----	---

所感

紫禁城では、まず巨大な午門の前で立ち止まり、中央は皇帝専用、その両脇は家臣たちの通路であったと伺い、歴史の重みを感じた。その威厳ある門を抜けると、目の前には広大な広場と雄大な太和門が広がっており、まさに「テレビで見たあの紫禁城の風景だ」と、参加者から声もれていた。太和殿の広場は、まさに圧巻の光景で、かつて皇帝の即位式などが行われたこの広大な空間と、威風堂々とした太和殿の建築を背景に、記念撮影をする人がたくさんいた。階段を上り、外から玉座を遠目に眺め、そのスケールの大きさや精巧な装飾に感嘆の声を上げ、かつてここで繰り広げられた国家の重要な儀式に思いを馳せた。乾清宮は、皇帝一家の生活空間であったため、太和殿などに比べるとやや親しみやすい雰囲気でも、それぞれに皇帝の執務や私生活が行われた空間に当時の宮廷生活を想像することができた。

故宮博物館は多くの観光客で賑わっていたが、それでもなお広大な敷地と宮殿のような外観が持つ壮さには圧倒された。この建物のゆとりのあるスケールこそが、かつてここに君臨した皇帝たちの絶対的な権威を物語っているかのようだった。また、細部に至るまで風水の思想に基づいて設計されたといわれる建築からは、ただの宮殿としてではなく、宇宙の理や自然との調和を重んじた思想が具現化されていることが感じられた。この緻密な設計こそ、王朝の永続を願う強い意志の表れであったはずだ。この巨大な建築群自体が、数千年にわたる中国文化の奥深さと、その継承の力強さを示す、歴史的遺産だと感じた。



10月23日(木) 科大訊飛

活動内容

10:00-11:40	AIを活用した教育製品と技術説明 1. 教育と個別最適化学習 スマート採点機：採点だけでなく、生徒の弱点の細分化に基づいて個々に応じた課題を生成する機能を備えている。効率的な学力向上を支援。 2. 大学入試と不正防止技術の応用
-------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・科大訊飛の AI 技術は、すでに大学入試の現場で応用されている。 ・特に不正防止に技術が活用されており、識別顔認証や声紋認証が導入されている。 <p>3. AI と教師の役割</p> <p>AI 技術の進歩によって教員が削減されるという懸念があるが、AI の役割はデータ分析や個別課題生成といった分野であり、教師は協働する必要がある。</p>
--	---

所感

科大訊飛の高度な AI 技術は、多言語翻訳システムや同時通訳機の基盤となっており、単に言葉を置き換えるだけでなく、それぞれの言語のアクセントやニュアンスにも対応しながら高い精度を実現しており、国境を越えたコミュニケーションを飛躍的に円滑化していく可能性を感じた。日本の学校現場では、多国籍な児童が通学しており、保護者との連絡が難しい場合があるため、このツールは日本語が困難な児童、保護者とのコミュニケーションの際にあると現場での負担が少ないと感じた。

また、科大訊飛は純国産の AI 開発にも注力しており、大規模言語モデルを活用することで、多言語での PPT の作成を瞬時に行えるなど、ビジネスシーンでの生産性向上に貢献している。これは、AI が単なる翻訳ツールではなく、複雑なタスクをこなす認知インテリジェンスを備えていることを示していました。

さらに、医療分野への応用も進んでおり、AI 医師による診断支援や、カルテの自動記入を行う機器も開発して医療現場における診断の質の向上と、医師の事務作業の負担軽減という、喫緊の課題解決に取り組んでいた。

音声・言語 AI を軸に、翻訳、オフィス業務、医療といった重要分野で、高い実用性を持つソリューションを次々と生み出していることに感銘を受けた。



10月25日(土) 首都博物館

活動内容

午前	<p>館内自由見学</p> <p>以下は各階の展示の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2階：旧石器時代から明代の北京成立まで、石器や青銅器などの発掘品や、城壁模型などの展示 ・ 3階：元～清代の書道や絵画などの作品や、都市の建設や社会構造に関する模型の展示 ・ 4階：古代～清代の陶磁器や仏像などの工芸品・美術品の展示。北
----	---

	<p>京製造のものだけでなく、他国や西域から伝来したものを含む。</p> <p>・ 5階：胡同や四合院での暮らしを再現した「老北京民俗展」を展開。婚礼・節日などの日常習俗や伝統工芸、京劇衣装など、かつての庶民の日常に関する展示。中華人民共和国設立とその後の紹介。</p>
--	---

所感

1時間で膨大な展示を子細に観覧することはできず、参加者は思い思いにターゲットを絞って見学した。その中で、私は5階の北京の庶民の暮らしぶりや、新中国設立に関する展示を中心に見学した。

5階では春夏秋冬の季節の移ろいを、胡同や四合院でどのように感じ、どのように過ごしているか、資料を基に展示していた。季節を読む工夫として、二十四節気の木札や風向きを測る簡易風標、季節の保存食づくりの道具などが示されていた。これらを通し、北京の人々が四季の変化を生活の判断基準として受け止め、日々の営みに活かしてきた姿が理解できた。私自身も20年近く前ではあるが、什刹海などの胡同巡りをしたこともあり、当時の北京市民の習俗を楽しく観覧した。

また、中国共産党の革命期から建国、改革開放までの歴史に関する、写真や模型などの展示も観覧した。天安門広場での建国宣言こそが現代の中華人民共和国の出発点であり、そこに至る経緯などを興味深く見学した。

今回、首都博物館を始めて訪問し、北京そのものに特化した数多くの史料を観覧でき、貴重な機会となった。西安の歴史博物館も訪問したことがあり、それよりも北京はだいぶ新しい街という印象を受けたが、だからこそ庶民の習俗の展示が充実していた。中国と交流を深める上で、北京とは何らかの形で関わりをもつはずである。その際、今回学んだ北京の変遷を念頭におくことで、より深い交流ができるものと期待している。

10月24日(金) 歓送会

活動内容

19:00-20:40 頃	振り返りスライドショー上映
	開会挨拶 中国教育国際交流協会 訪問団団長 乾杯のご発声 文部科学省
	会食・歓談（北京ダック実演、琴演奏、変面ショー含む） 記念品交換
	閉会

所感

このプログラムを通じて、中国教育国際交流協会の皆様には、一貫して厚いおもてなしを頂き、その締めくくりとして大変充実した歓送会であった。参加者一同、中国のおもてなし文化に感銘を受けた。この会を含めたご挨拶を通じて、中国側がいかに本プログラムを重視しているかを感じることができた。これもひとえに、代々の参加者が日中の教育交流に多大な貢献をされてきたことや、文部科学省や ACCU が、中国からの参加者を厚くもてなしてこられたことが、今回の厚遇に繋がったのだと思う。

私自身は配席の都合上、本歓送会で中国側の方とお話しできず残念ではあったが、日本の先生方とこの4日間を振り返った感想、意見や疑問点を共有することができた。

今後は、このプログラムに参加した日中双方の教員が協力して、双方を互いに尊重しあえる生徒の育成に取り組みたいとの思いを新たにしました。



3. 参加者の声

以下、プログラム参加後に参加者から寄せられたコメントを一部編集して掲載する。

プログラムに対するご感想

体験と交流の重要性を肌で感じた。教育に情熱を傾ける人々が直接顔を合わせ、お互いの温度を感じられる距離で対話と交流を重ねることで、文化、習慣、教育事情・実践を知り、相手国を理解し、友好を築いていく。この一期一会の機会こそ、最も価値ある教育資産である。

訪中前、果たして好意的に受け入れていただけるのか不安もあった。しかし行く先々で歓待され、見学や交流をしながら、改めて民族を超えた人の温かさ、学校と教育の力、協力が生み出す可能性、文明や歴史を作る人間のすごさを感じることができた。現在の思いは、よく言われるセリフであるが、自分は世界の 82 億余人の一人として「微力だが無力じゃない」ということだ。また、やる気も頂いた。目の前の生徒にできる限り国際交流の機会を作っていくことから始めたい。

訪問団として日本全国各地の様々な校種の先生方と知り合い、意見交換ができたことも大きな財産となった。普段、かなり限られた場所と人との交流が主になってしまっており、自分の世界が狭まってしまっていたことに気づくことができた。次々に交わされる意見やアイデア、視点に触れることができ、自分の学校で実践したいことが溢れるようで、存分に英気を養うことができた。また、プログラム終了後も、セミナーや施設見学などに関する情報交換を行ったり、日本各地、中国とオンラインなどで交流する機会を設けたりと、活動の幅を広げることもできており、誰かとつながることが、可能性を無限に広げてくれることを実感することができた。

本プログラムでは、教育だけでなく歴史・文化・最先端の技術など、多角的に中国を知ることができ、視野を大きく広げることができた。それと同時に、中国への興味関心がさらに大きくなり、もっと知りたいという意欲が湧きあがった。自分の目で見て、体験し、たくさんの方々と交流できたこの経験は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献する重要な一歩になったと強く感じる。今回の経験を教育活動に活かし、「相手を知ること」の大切さを子どもたちに伝え、異なる文化や価値観を尊重し合いながら学ぶ力を育てていきたい。

中国の教育から「新たに学んだこと」等

今回のプログラムは、最高行政機関（教育部）から大学、幼小中高一貫教育そして教育 AI の最先端企業に至るまで、中国教育システムの全貌を立体的に把握する極めて有意義な機会であったと総括する。このような一貫教育や多言語教育の体系化に触れ、学びの連続性の重要性をあらためて再認識した。中国の教育は国家戦略と強く結びつき、強力な実行力のもと、国際化とデジタル技術（AI）を急速に取り込みながら「個性尊重」の方向へと進化している。また、科大訊飛における AI 教育の進展は、教育の質とスケールを両立させる具体例として衝撃的であり、日本の教育現場におけるデジタル変革のスピード感を再考させるものであった。

プログラムを通じて、「多角的な評価」「裁量の自由度」「若手の情熱」など、教育改革の具体的なヒントを得ることができた。単なる「視察」ではなく、「比較」と「内省」を通じて、教師として自身の内なる変革の決意を固めることができた。この経験を、自己満足で終わらせるのではなく、所属校の教職員に伝え、共に教育を変えていくための力強い志として、今後の実践に活かしたい。

実際に訪れた中国は、日本と比べものにならないほど発展しており、むしろ日本の方が型にはまっているのではないかと思えるほど、中国は自由度が高かった。教育現場においても、学校ごとに特色を打ち出す裁量があり、先生方が生き生きと教育を語られている姿が印象的であった。さらに、視察した中高一貫校では、日本語を流暢に話す生徒によるプレゼンテーションを聞いたり、生徒と交流したりする中で、わずか3～6年でネイティブと対等に会話できる教育を実現していることに大きな衝撃を受けた。

日本との教育理念との共通点を多く見ることができた。中国の「全人的育成」や「健康第一」の教育理念は、日本の「生きる力の育成」と多くの共通点があり、教育の本質に対する考え方に深い共感を覚えた。

最も大きな学びは、中国教育部の方も現場の先生方も「児童生徒の興味や関心を育てたい」という思いをもつことを知れたことにある。単なる知識の暗記ではなく、学ぶことそのものの価値を知り、それを社会で役立てようと願う子どもたちを育てることは、両国共通の課題であることが分かった。こうした生徒は、必ずや協働してよりよい社会を作ろうとする、リーダーとして成長していくことであろう。こうした児童生徒を育成するため、我々教員同士で、授業の題材や計画、評価などについて、お互いに協力できる場面は大きいと考えられる。

プログラムの中で最も記憶に残った瞬間

見学させていただいた学校は、それぞれに特色ある教育活動を行っていたが、どの学校でも先生方が児童生徒の力を伸ばしていきたいと考えている姿は同じだと強く感じた。「子どもたちが偉大になれる場所を見つけ、その道を歩んでいく手助けをする」という北京第一実験学校の先生の言葉が非常に印象的で心に残っている。今後も自校の教育活動に留まらず、様々な場面での教育活動に還元していきたい。そのために自分自身が学び続けることを忘れないでいようと思う。

南開大学附属小学校を訪問した際、まず印象に残ったのは、児童が整った姿勢で来訪者を迎える姿であり、その態度には学校教育における礼儀指導の質の高さが端的に表れていた。続いて披露された伝統楽器の演奏は、技巧面だけでなく、幼いながらも音楽表現に対する真摯な姿勢が感じられ、強く感銘を受けた。

現地の子どもの中には日本のキャラクターグッズを使用している子がいたり、礼儀正しい子がいたり、宿題に追われている子がいたりなど、施設面や制度面の表面的な違いを除けば、日本の子どもと全く変わらなかった。



参加者がプログラム参加後に作成したアクションプラン（プログラムでの学びを自身の教育実践等に活かすための行動計画）は ACCU ウェブサイトに掲載しています。右の QR コードからぜひご覧ください。



4. プログラム参加後の取組

中国現地でのプログラム終了後、参加者を対象に、その後の取組に関するアンケート調査を実施した。以下、アンケートの回答内容を一部編集して掲載する。

教職員及び児童・生徒への成果共有

対象者	中学校 1 年生～ 3 年生
対象人数	300 名
具体的な活動	<p>講話にて「中国派遣プログラム」での視察報告を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地の生徒たちが日本のアニメや伝統文化に深い敬意を持ち、積極的に日本語で交流を図ろうとする姿、特に放課後や休憩時間であっても、日本の社会情勢や大学での研究内容について熱心に質問を投げかけてくる「知への渴望」が感じられる姿勢を紹介した。 ・ 進学面では日本の旧帝国大学や早慶クラスといった最難関大学への合格を明確な射程に捉えている。日本の受験生を凌駕するほどの圧倒的な学習量をこなし、試験の傾向を徹底的に分析して目覚ましい合格実績をあげている現状を紹介した。
対象者(参加者)からの感想・その後の進展など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの生徒が、海の向こうにいる同世代が自分たちを上回るほどの熱量で日本について学び、かつ日本の難関大学を目指しているという事実に強い衝撃を受けていた。 ・ 現地の生徒たちの具体的な進学実績や学習量を知ることで、自らの現状を客観的に見つめ直す姿が見られた。「自分は恵まれた環境にいながら、どこか甘えがあったのではないか」「目標設定が低すぎたかもしれない」と、これまでの学習態度を省みる反応もあった。 ・ 中国の生徒を単なる「遠い国の優秀な人」としてではなく、将来同じ社会で活躍する「ライバルであり、共に学ぶ仲間」として捉える視点の広がりを感じられた。「将来、彼らと一緒に仕事をするかもしれない。その時に引けを取らない実力をつけたい」「ライバルがいると思うと、今日からの勉強に身が入る」といった、前向きな競争意識とグローバルな視座からの意欲向上が確認された。

対象者	近隣市町村の教頭
対象人数	20名
具体的な活動	教頭会で以下の項目について研修報告を行った。 ①中国の教育制度②教育機関の視察③中国の科学技術の発展 ④所感と国際プログラムについて
対象者(参加者)からの感想・ その後の進展など	わずか3～6年で日本語が流暢に話される姿や教師の裁量の 自由度などに驚いたという声が多数挙がった。中国の教育の自 由さに職員の多くが驚いていた。

対象者	所属校教職員
対象人数	30名
具体的な活動	パワーポイントを使用し、訪問した都市(北京、天津)、中国 教育部が考える教育方針、教育ICT、訪問先の学校の様子、日 中の教育の共通点等を紹介した。
対象者(参加者)からの感想・ その後の進展など	日中の教育が似ていること、生徒たちの日本語能力の高さへの 驚きの声や中国への印象の変化などの感想が寄せられた。

対象者	所属校児童、所属校教職員
対象人数	850名
具体的な活動	校内の廊下で壁面掲示を行った。 ・南開大学附属小学校、北京第一実験学校、北京市月壇中学の 学習の様子、校内施設や学習用具の紹介 ・中国企業で学んだ内容の紹介 ・中国の料理の紹介
対象者(参加者)からの感想・ その後の進展など	以下の感想が寄せられた。 ・中国の料理を食べてみたい。 ・大人になったら中国へ行ってみたい。 ・休み時間にボルタリングやバスケなどの運動ができて羨ま しい。 ・(中国から来た児童)中国の料理を食べに中国へ帰りたい。 ・日本の学校と同じところや違うところがあっておもしろい。

授業を通じた実践

対象者	中学校 3 年生
対象人数	160 名 (40 名 × 4 クラス)
具体的な活動	英語の授業で天津外国語大学附属外国語学校について、学校の 外観、今回の訪問、日本語の授業の様子を映した写真等を使用 し、学校の様子を紹介した。同時に同校とのオンライン交流予 定の案内を行った。
対象者(参加者)からの感想・ その後の進展など	生徒たちは、同学年の中国の生徒が外国語として学んでる日本 語で自己紹介を物おじせず行う様子に感銘を受けていた。

対象者	小学校 6 年生
対象人数	54 名
具体的な活動	6 年社会科「日本とつながりの深い国々」の授業にて、パワー ポイントで以下の内容を紹介した。 ・ 中国とはどんな国なのか ・ 北京、天津の場所や気候、どんな都市なのか ・ 訪問先の学校の授業の様子 ・ 自動運転車、中国企業、本屋の様子 ・ 日中の古くからの交流 ・ 日中の教育や子どもの共通点 ・ 日中のこれから
対象者(参加者)からの感想・ その後の進展など	以下のような感想が寄せられた。 ・ 中国の技術が進んでいることに驚いた。 ・ 中国の学校規模が大きく、児童会活動はどのようにしている か気になる。 ・ 全校集会はどうやって集まるのかが気になる。 ・ 学校だけでなく、街並みなど、もっと中国のことを知りたい。

対象者	小学校 6 年生
-----	----------

対象人数	33名
具体的な活動	現地の学校生活を視覚資料で紹介した。特に同じ公立学校であっても学校ごとに特色あるカリキュラムが生まれ、学び方が多種多様である点や、ICT 機器や特別教室などの施設環境が充実している点について触れた。これらの違いを認識させた上で、休み時間の様子など同年代としての共通点についても考えさせ、広い視野を持って中学校生活へ向かうためのキャリア教育の一環とした。
対象者(参加者)からの感想・その後の進展など	児童は、日本の公立学校との環境の差異に驚きつつも、高い関心を寄せていた。日頃より担任から中国に関する話を聞いており、一定の関心を持っていたが、視察による現地の詳細な写真や具体的なエピソードに触れることで、その興味・関心はより一層深まった様子であった。特筆すべきは、クラスに在籍する中国籍児童の意識の変容である。同じ教室で学ぶ「個」としての友人を見つめ直し、友好関係を築こうとする前向きな姿勢が顕著に見られた。異文化理解にとどまらず、多文化共生の視点を育む貴重な実践となった。

対象者	小学校4年生
対象人数	144名
具体的な活動	今回の訪中で見た中国の教育現場を日本と同じところや違うところという観点で紹介した。途中で中国語のクイズを挟むなど、興味関心を持ち続けて聞いてもらえるよう工夫した。結びとして、色眼鏡で物事を捉えず、自分で見て感じて、自分の考えを持つことが大切だということ、中国に限らず世界の国のことを学んでいく、そして平和な世界をつくりだすことを話した。
対象者(参加者)からの感想・その後の進展など	中国も日本も似ていることが多い、という感想が寄せられた。参加者には中国から来日して一年未満の児童もいたが、その子ども達がクイズなどで活躍できていた。

5. 資料編

参加者情報

参加者の所属校

江戸川区立江戸川小学校	大阪市立玉造小学校
文京学院大学女子中学校 高等学校	山形県立東桜学館中学校
茨城県立並木中等教育学校	大阪市立中央小学校
兵庫県立吉川高等学校	西之表市立現和小学校
千葉市立稲浜中学校	鹿児島市立谷山北中学校
調布市立調布中学校	山梨県立甲府第一高等学校
茨城県立那珂湊高等学校	神奈川県立横浜国際高等学校
茨城県立牛久米進高等学校	笛吹市立春日居小学校
大阪市立塩草立葉小学校	兵庫県立姫路商業高等学校
豊田市立高岡中学校	石垣市立野底小学校
江南市立古知野東小学校	筑波大学附属高等学校
廿日市市立金剛寺小学校	

参加者の校種

小学校	9名
中学校	4名
高等学校	7名
中等教育学校	1名
中高一貫校	2名

参加者の役職

校長	1名
副校長	1名
教頭	3名
主務教諭	3名
教諭	15名

プログラム関係機関

<日本側機関>

文部科学省/ Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology - Japan

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

<中国側機関>

中国教育部/ Ministry of Education, People's Republic of China

中国教育国際交流協会/ China Education Association for International Exchange

中華人民共和国駐日本国大使館 Embassy of the People's Republic of China

<訪問機関>

中国教育部/ Ministry of Education, The People's Republic of China

北京市月壇中学/Beijing Yuetan High School

北京第一実験学校/ Beijing Navigation School

天津外国語大学附属外国語学校/ Tianjin Foreign Languages School Affiliated to Tianjin Foreign Studies University

南開大学/ Nankai University

南開大学附属小学校/ Affiliated Primary School of Nankai University

文部科学省委託 令和7年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

2026年3月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL <https://www.accu.or.jp>

本報告書は、文部科学省の委託事業として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施した「新時代の教育のための国際協働プログラム（初等中等教職員国際交流事業）」のうち、中国政府日本教職員招へいプログラム（中国派遣プログラム）の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

©2026 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)